

ラテンアメリカ

# 随想

## 『神からの近さーメキシコとブラジル』

山田 彰

初めてラテンアメリカの地を踏んだのは、1976年大学生の時である。福岡県青年商工会議所のミッションの末端のメンバーとして、メキシコ、ブラジル、アルゼンチンの3か国を2週間弱にわたり訪れ、各地で福岡県人会など日系人の方々にお会いした。この旅は私のその後の人生に少なからぬ影響を与えた。外務省に入った後は、ラテンアメリカに何度も出張して、ラテンアメリカの国はすべて2度以上訪問することになった（カリブ地域は未踏破の国もある）。そして、学生時に旅したアルゼンチン、メキシコ、ブラジルに外交官として勤務することになったのは、何かの縁だろうか。

さて、私は、ラテンアメリカの北の大国メキシコから南の大国ブラジルに異動してきたので、どうしても両国を比較する観点で見ってしまう。ブラジルは、ラテンアメリカ随一の大国であり、唯一のポルトガル語圏国であり、周辺の南米諸国とは文化、歴史、社会の諸側面での違いが大きい。一方メキシコは、面積はブラジルの4分の1強だが、近隣の中米諸国と比べれば国の規模が断然大きく、地域の大国であることは間違いない。

両国の社会を比べると、メキシコの方が「陰影が深い」という気がする。これには、両国の歴史的な背景の違いが大きく影響しているであろう。

### 神から遠い？メキシコ

「哀れなメキシコよ、かくも神から遠く、米国から近い。(Pobre México, tan lejos de Dios y tan cerca de Estados Unidos.)」と嘆いたのは、メキシコの独裁的大統領だったポルフィリオ・ディアス(1830～1915年)である。実際にこの文を書いたのは、Nemesio García Naranjoという知識人だったらしいが、メキシコの地政学的な困難さを表した、ディアスの言葉として知られている。

メキシコは戦争などで国土の約半分を米国に奪われ、隣の巨人である米国との関係をいかにマネージするかに常に大変な苦勞をしてきた。

1994年発効のNAFTAによって、メキシコは経済面で米国との連携を深め、国を開き、投資を呼

び込み、資源だけに頼らず、工業化を図る、という形で国を発展させて来た。NAFTA発効後の20年間以上メキシコ・米国関係は安定していたと言ってよいだろう。しかし、トランプ政権発足以降、国境の壁の建設問題、移民問題、NAFTA再交渉など米国との関係については大変な「苦勞」を強いられ続けている。

一方のブラジルでは、米国との関係が緊張感をもって感じられることはない。ボルソナーロ政権になってから両国首脳の関係は極めて良好であり、またブラジル外交にとっても米国は最重要国に位置づけられるのであろうが、「トランプ大統領にとって、ブラジルの存在はほとんど眼中にない（在ブラジル外交筋の発言。ただし、ボルソナーロ政権になってかなり



ペニャニエト メキシコ大統領と（2014年信任状奉呈時）

変わったと考えられる)」ようにも思えるし、(メキシコ人の感覚と違って)ブラジルの一般国民にとって米国の動向は、遠い国の出来事である。

### 修羅場のなかった南米の大国

ブラジルは、米国から遠いだけでなく、欧州からもアジアからも遠い。同時に、南米の中では国土、人口、経済などあらゆる面で圧倒的な大国として特別な存在感を持つ。表現は良くないが、南米大陸での『お山の大将』であり、外部との競争にさらされているという感覚は薄い。

ブラジルには、安全保障上真に脅威になるような国は存在しなかった。歴史上、ブラジルは、国土が大規模な戦争の戦場になることもなく、国外に戦争に打って出ることほとんどなく、政治的な変革もおおむね大した流血を見ることはなかった。豊かな資源に恵まれ、国民が飢えに苦しむようなこともなかった。ある意味では羨むべきことであるが、ブラジルは『修羅場をくぐったことがない国』

である。

メキシコは、今でこそ安定した民主主義国家だが、コルテスの侵略から始まって、(いやそれ以前の文明間でも多くの血塗られた抗争があった)、独立戦争、内戦や外国との戦争、などメキシコ近代史は修羅場、動乱に事欠かない。

メキシコと比較すれば、ブラジルは、外部からのインパクトによって国の在り方が影響されることがはるかに少なかったといえよう。こうした歴史的、地政学的環境から考えると、ブラジルの変化というものは、外部の力より内在的な力で起こるのではないか、という気がする。大統領弾劾、大規模汚職事件(ラバジャット)捜査、2年連続のマイナス成長など危機的な状況を経たのち、今日のブラジルは変化を起こしつつある。テメル政権下で実現した労働改革、現在議会で審議中の年金改革、さらにすでに議会でも議論が始まっている税制改革など、必要と言われながら長年先送りされてきた改革がゆっくりではあるが、前進しつつある。

### 神はブラジル人?

「神から遠い」のがメキシコの嘆きだとすれば、ブラジルの国民性を示しているのが、『神はブラジル人である』という表現である。ブラジルには潤沢な天然資源がある、何かうまくいかないことがあっても、神はブラジル人だから最終的にはハッピーな結果になる、といったブラジル人の楽天的気質を表している。2007年、サンパウロ州沖合で新たに国内最大級の油田が発見された際に、ルーラ大統領は大統領官邸で行った演説の中で、「神様はブラジル人に違いない」と喜びを語った。当時、英経済誌“The Economist”も「結局、神は本当にブラジル人かもしれない」と題した、油田発見の関連記事を掲載している。

その後2010年代半ばからの政治・経済危機のことを考えれば、油田が見つかったからと言って、「神はブラジル人だ」とはとても言えない。しかし、ブラジルの豊かな、恵まれた国土を旅すれば、「神はブラジル人だ」と根拠なく?楽観的になれるブラジル人の気持ちは良く理解できる。

日本から見れば、メキシコも豊富な天然資源と広い国土に恵まれている。神様からはそんなに遠くない、もっと近づけるように思えるが、米国から近いことは変えようがない。

### 大いなる親日国

大使として両国を見た時の最大の共通点は、いずれの国も日本に対する強い親近感を持っているということだ。長い移住の歴史を持ち、日系社会は現地の信頼を得ており、長年の官民による経済技術協力はそれぞれの国の発展に大き



ボルソナーロ次期大統領(当時)に日本酒を贈る(2018年12月)

く貢献してきた。日本の科学技術への憧れやポップカルチャーへの高い関心も共通している。

特に、私にとって、中南米日系社会との連携・協力の強化は、中南米を担当する外交官としてのライフワークと言ってもいいかもしれない。これまでも様々なポストでそのための施策を考えてきた。ラテンアメリカへの最初の旅が日系社会を訪ねる旅であったことも、影響していると思う。

メキシコでも、ブラジルでも、各地の日系社会を訪問し、様々な行事に参加してきた。そうした訪問のたびに、私は、日本人移住者・日系人の皆さんが忍耐・努力を重ねてそれぞれの社会において強い信頼を勝ち得てきたという『先人

たちの努力』と、日本の文化や伝統を日系社会において受け継ぐとともに社会に広く普及しているという『今日の人々の努力』を感じる。

むろん中南米の日系社会は世代の変遷、外部環境の変化等により、変化している。こうした変化を踏まえつつ、これからは、日系人の若い世代が、いかに日系人としてアイデンティティを保ち、日本との絆を維持していくのか、それぞれの国で社会に対し現代の新たな日本の魅力、情報を発信するなど活躍をしてもらえるか、そのために我々は何ができるのか、ということ日々考えている。

(やまだ あきら 在ブラジル日本国大使)



アカプルコでの全メキシコ日系人大会にて



Vibra Joven (メキシコでの日系青少年の集い) に参加して